

## プログラム・ノート

寺西基之

今年10周年を迎えるサントリーホールの室内楽音楽祭「チェンバーミュージック・ガーデン(CMG)」。毎年オープニングは、サントリーホール館長である堤剛が企画と演奏を担う「堤剛プロデュース」が恒例となっている。この「堤剛プロデュース」は毎回趣向が異なり、それによって大チェリスト堤剛のいろいろな面に触れることができるのが興味深い。例えば2016年には、作曲家でピアニストの野平一郎とのデュオによる近現代作品(野平の新作を含む)の渋いプログラムでシリアスな名演を披露し、2019年にはサントリーホール室内楽アカデミーのフェローによる合奏団をバックに、若い奏者たちと演奏する喜びを分かち合うような生気溢れるハイドンのチェロ協奏曲第1番を聴かせるなど、演奏家としての堤剛の懐の深さがこれまでの「堤剛プロデュース」を通して明らかにされてきたといえるだろう。今回はわが国を代表するピアニストである小山実稚恵との共演による、ブラームスのチェロ・ソナタによるプログラム。CMG10周年の幕開けを飾るに相応しい、大家どうしががっぷり四つに組んだ重厚かつ熱のこもった演奏になるに違いない。

### ブラームス：チェロ・ソナタ第1番 ホ短調 作品38

ヨハネス・ブラームス(1833～97)のチェロ・ソナタは2曲が現存しているが、そのうち第1番は1862～65年に作曲された。比較的若い時期の作ながら渋い色合いを基調にした味わい深い名品で、ブラームスの作品にしばしば見られる暗いメランコリックな叙情と内向的な情熱性が全体を支配している。とりわけチェロの低音域を用いている点が、この作品のそうした特徴を際立たせている。一方でチェロとピアノの緊密な関係や全体の確たる構成もブラームスらしく、内省的な情感の表現と堅固な造型が見事に結び付いている点に若き彼の老成した筆遣いが窺えよう。

**第1楽章**(アレグロ・ノン・トロppo)は静かに歌い出される低いチェロの第1主題と悲痛な気分の第2主題によるソナタ形式で、対位法書法の多用が厳粛な情調を高めている。**第2楽章**(アレグレット・クワジ・メヌエット)は軽やかさの中にも寂しい情感を秘めたメヌエット風の楽章。**第3楽章**(アレグロ)はフーガ風に発展する激しい情熱に満ちたフィナーレである。

## ブラームス(クレンゲル 編曲):チェロ・ソナタ ニ長調

この作品の原曲はヴァイオリン・ソナタ第1番 ト長調 作品78である。ブラームスが1879年夏に完成させたこのヴァイオリン・ソナタ第1番は、しっとりとした趣の中にどこか寂しさの漂う味わい深い作品だ。注目すべきは、終楽章の主題として自作の歌曲「雨の歌」作品59-3と歌曲「余韻」作品59-4の両者に用いられた旋律を引用している点である。歌曲「雨の歌」はブラームスの憧れの女性クララ・シューマン(1819～96)が好んでいた曲で、雨に昔の思い出を重ねた回顧的な歌詞を持つ。「余韻」も雨を自分の涙に譬えた詞<sup>たと</sup>によっている。こうした歌曲の主題を引用することで、ブラームスはこの作品でクララへの想いとその裏にある寂しさや回顧の情をひそかに表したと思われる。今回はヴァイオリニスト、ピアニスト、合唱指揮者であったパウル・クレンゲル(1854～1935)によるチェロ編曲版で演奏される。

**第1楽章**(ヴィヴァーチェ・マ・ノン・トロツポ)は穏やかな情感を湛えた第1主題に始まるソナタ形式。展開部では情熱の高まりを示す。**第2楽章**(アダージョ)は美しい叙情の支配する主部に対し、中間部では激しい内面の動揺が表される。**第3楽章**(アレグロ・モルト・モデラート)は先述のように歌曲「雨の歌」「余韻」の旋律を主題とするロンド。第2エピソードとしては第2楽章の主題が用いられている。

## ブラームス:チェロ・ソナタ第2番 ヘ長調 作品99

暗い重々しさを打ち出した第1番 ホ短調に対し、後期の1886年に書かれたこの第2番は、明るい情熱的な曲想のうちに、晩年のブラームスの複雑でデリケートな内面の心情を表し出したような作品である。広い音域と、トレモロやピッツィカートをはじめとする多様なチェロの奏法を生かすことで、表現に広がりとおもしろさをもたらしつつ、チェロとピアノが重厚な響きを作り上げている。そこには、円熟期のブラームスの確かな筆遣いと音楽的熟成が示されているといえよう。4楽章構成をとっている。

**第1楽章**(アレグロ・ヴィヴァーチェ)はピアノのトレモロの上でチェロが決然と第1主題を奏して始まる。トレモロが多用され、展開部後半ではチェロのトレモロとピアノの和音が独特の雰囲気を生む。**第2楽章**(アダージョ・アフエットウオーソ)はピッツィカートとアルコを使い分けた美しい緩徐楽章。不安げな中間部が挟まれる。**第3楽章**(アレグロ・パッショナート)は激情的なスケルツォ風の楽章。中間部では息の長い旋律が歌われる。**第4楽章**(アレグロ・モルト)は軽快かつ親しげな主題を軸にしたロンドである。